

題目 ネガティブ状況・ポジティブ状況における羞恥の文化差とその原因
—比較社会生態学的アプローチからの検討—

氏名 前田友吾

指導教員 結城雅樹

羞恥は日常の様々な場面において経験される感情である。羞恥の発生する状況はさまざまであり、人前で転んでしまうような身体的失敗や相手の名前を忘れてしまうような認知的失敗が起きた時などのネガティブな状況が多い。しかし、羞恥は褒められたときのようなポジティブ状況においても発生することがわかっている (eg, Lewis, Stanger, Sullivan & Barone, 1991)。では、これらの羞恥に文化差というものはあるのだろうか。Lewis et al(2010)では就学前児童の失敗・成功場面における羞恥の文化差を示しており、ネガティブ・ポジティブの両状況において日本の方が羞恥を示すことが示唆されている。しかし、羞恥の文化差研究は少なく、また Lewis et al(2010)においても文化差を生む要因は検証されていなかった。そこで、本研究はネガティブ状況・ポジティブ状況における羞恥の文化差を検証し、環境に対する適応戦略としての感情の機能 (eg, Keltner & Gross, 1999) から社会生態学的アプローチ (Oishi & Graham, 2010) を用いて文化差の要因を説明することを目的とした。本研究では、社会生態学的要因として「対人関係の選択の自由度」とされる関係流動性 (Yuki & schug, 2012) に注目し、高関係流動性社会であるアメリカと低関係流動性社会とされる日本の二か国による国際比較研究を行った。予測としては低関係流動性社会である日本において、ネガティブ状況・ポジティブ状況の両状況においてより羞恥を感じやすいという文化差がみられ、その文化差は関係流動性の高低により説明されるという予測を立てた。また、ポジティブ状況における羞恥は関係流動性の高低が成功者への批判的信念に影響を与えるということに文化差が説明されると予測した。結果は、ネガティブ状況においては日米に差がみられず、ポジティブ状況においては日本においてより羞恥が高かった。また、この文化差は社会環境要因の一つである関係流動性と他者の成功に対する批判的信念である成功罰信念により部分媒介がみられた。以上の結果からポジティブ状況における羞恥は予測と一貫した結果が得られ、社会環境の特性が羞恥の発生に影響を及ぼしているということが示唆された。今後の展望として、本研究はあくまで質問紙を用いた調査であったため、羞恥の機能的側面や表出、生理指標に関しても文化差を検証し文化が感情に与える影響を明確にしていくことが期待される。